

中国出身留学生は日本のサブカルチャーを通して 日本をどう捉えているか

松田 勇一*・安 龍洙**

(2018年10月1日受理)

Perceptions of Japan by Chinese Students in the Country as Seen in Japanese Subculture

Yuichi MATSUDA* and Yong Su AN**

(Received October 1, 2018)

要旨

本稿では、中国人留学生在日本のサブカルチャーを通じて日本文化をどのようにとらえているのかを明らかにするために、中国人留学生4名に対してPAC分析法を用いて調査を行った。その結果、中国人留学生は日本のサブカルチャーと若者文化を同類のものとして捉えることがあること、サブカルチャー・若者文化から流行が産み出されると考えていること、サブカルチャー・若者文化として「SNS」、「お笑い」、「風俗」、「漫画」、「音楽」、「東京」というイメージを抱いていること、サブカルチャー・若者文化は伝統的な日本の文化や特徴とは異なると考えていること、サブカルチャーの中でも特に漫画やアニメが日本語学習や日本留学の動機になっていること、オタクについてはマイナスイメージを持っていること、等が示唆された。

【キーワード】 中国出身留学生、サブカルチャー、若者文化、異文化理解、PAC分析法

1. はじめに

独立行政法人日本学生支援機構(2018)によると、2017年に日本の外国人留学生数は267,042人となり、2008年に策定された「留学生30万人計画」の目標数値に近づいている。中でもアジアからの留学生は全体の93.3%を占め、特に中国からの留学生が全体の40.2%と大きな割合を占めている。このような外国人留学生が増加している状況において、外国人留学生が日本、日本人、日本文化をどのようにとらえているのかを考察することは、相互交流、あるいは共生に必要なことだ

*宇都宮共和大学シティライフ学部 (〒320-0811 宇都宮市大通り1-3-18; Faculty of City-life Science, Utsunomiya-kyowa University, 1-3-18 Ohdori Utsunomiya-shi 320-0811 Japan)

**茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

と考える。本研究は日本社会における「外国人」と「日本人」の異文化相互理解の実態とその特徴について認知的・情意的な観点から質的に検証し外国人と日本人の相互理解と相互交流の課題と問題点を検討する一連の研究の一部である。

中国人を対象とした対日観の研究は、安 (2010b, 2012, 2013)、松田・安 (2018) がある。安 (2010b) は中国人非正規留学生 4 名を対象に、安 (2012) は中国の少数民族出身者 4 名を対象に、安 (2013) は中国人留学生 4 名を対象に、松田・安 (2018) は中国人交換留学生 4 名を対象に、それぞれ個人別態度構造分析法 (Analysis of Personal Attitude Construct : PAC 分析法) を用いて、考察を行っている。これらの先行研究では、被調査者に対して刺激語を与え、対日観について調査している。安 (2010b, 2012, 2013) は、刺激語「日本、日本人、日本社会についてどんなイメージを持っているか」を与え、全体的な対日観を尋ねた。松田・安 (2018) は、刺激語「私が生活する日本の社会」、「私と日本人がつきあうこと」、「私の国の人と日本の人が分かり合うこと」を与え、留学生本人が日本という異文化をどのように理解しているのかに焦点を当てた。本稿では、これらの先行研究とは異なった観点、つまり「サブカルチャー」と「若者文化」という観点から考察を行い、先行研究では指摘できなかった留学生の異文化理解に関して明らかにしたい。

本研究において「サブカルチャー」と「若者文化」を取り上げる理由は、それらが外国人留学生にとって日本や日本語について興味を持つ大きな動機になっているからである。大塚 (2018) は、海外のアカデミックな場において漫画やアニメに強い影響を受けている日本語学習者、研究者に会うことが少なくないとしている。また、外国人留学生だけではなく、海外からの旅行客も日本のアニメ等のサブカルチャーを目当てに訪日することも指摘されている (付・方 2017)。これらの先行研究で指摘されているだけではなく、日本語教育の現場に立つ者であれば、留学生の学習動機や興味関心の中に日本の漫画、アニメ、サブカルチャーがあることは自明の理であろう。

以上の理由により、本研究では「サブカルチャー」と「若者文化」を取り上げるが、サブカルチャーと言っても宮沢他 (2017) で示されている通り、その範疇は広く、また時代により異なるものである。したがって、本研究では「サブカルチャー」を特定のジャンルに限定することなく、伝統文化ではなく日常的に親しまれている文化とし、留学生が「サブカルチャー」をどのように捉えているのかも同時に観察していきたい。

2. 方法

本稿では、中国出身大学院生 4 名を対象に PAC 分析法を用いて研究を進めた。被調査者 4 名は、来日後 2～3 年が経過しており、現在は日本の大学院で研究活動を行っている。

調査は第 1 部と第 2 部に分けられるが、第 1 部は被調査者本人の同意を得てフェイスシートに被調査者の属性を記入させてから、質問紙を用いて以下のように調査を実施した。

まず、被調査者に以下の刺激語を与え、「①日本のサブカルチャー、②若者文化」を含めてイメージ項目が 10 項目以上になるように記入させた。

【刺激文】 サブカルチャーとは、日常的に人々に親しまれている文化です。例えば、娯楽、スポーツ、芸能、ファッション、若者文化などを指します。茶道や歌舞伎などの伝統文化はサブカルチャーに含まれません。

あなたは「日本のサブカルチャー」に対してどのようなイメージを持っていますか。

思い浮かんだイメージを「単語 (例：花、綺麗、綺麗だ)、または短い文 (例：花は綺

麗だ、花は綺麗)」で記入してください。

その後、その連想イメージを重要と思われる順序に並べさせた。更にそれぞれのイメージ項目の組み合わせが、直感的イメージでその意味内容においてどの程度近いのかを7段階尺度で評定させた。この尺度での回答をもとに、ワード法でクラスター分析し、その結果に対する対象者自身の解釈を求めた。最後に連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は (+)、マイナスイメージの場合は (-)、どちらともいえない場合は (0) の記号を記入させた。

第2部は口頭により、1) 各クラスター及びクラスター全体の解釈、2) 各イメージ項目に対して、そのイメージを抱くようになったきっかけや媒体を尋ねた。

調査は2018年7月から8月に第2著者が実施し、被調査者の誤用については正しい日本語に直し分析を行った。また、本稿では被調査者が特定されないように地名、国名、大学名、施設名などはすべて○にした。

3. 結果

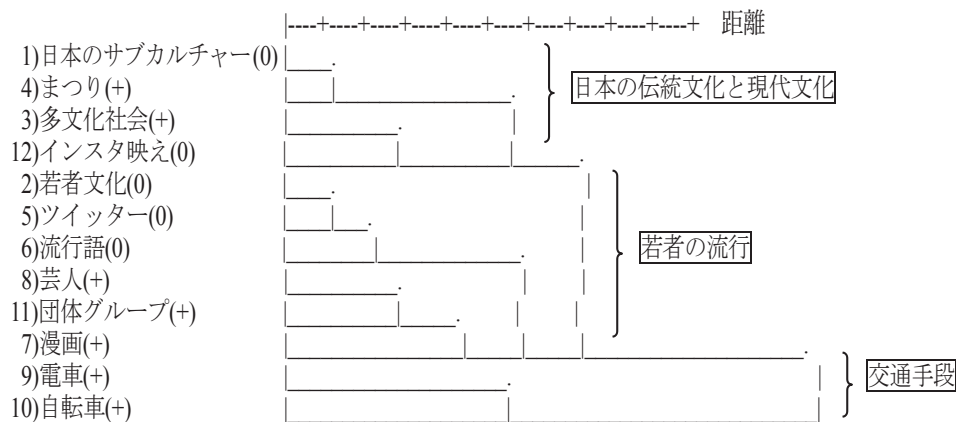
ここでは、まずクラスター分析の結果を示し、その結果に対する被調査者自身の解釈を示す。

3.1. 被調査者 A の場合

図1は、被調査者 A のデンドログラムである。

クラスター1は『1. 日本のサブカルチャー(0)¹⁾』『4. まつり(+)]『3. 多文化社会(+)]『12. インスタ映え(0)]の4項目でクラスター名は「日本の伝統文化と現代文化」とした。クラスター1は「私から見ると、主に日本の古いものっていうか、伝統的なもの、かつ、今の日本の社会のもの、大きなくくりでくくったものかなっていうふうに考えてます。外国人として日本に来た結果っていうか、クラスター1の祭りとか多文化社会とかをテレビとかいろんなマスメディアから知った上で、日本に対するイメージがワッと強くなったのかもしれないというふうに今、感じています。」と解釈した。

クラスター2は『2. 若者文化(0)]『5. ツイッター(0)]『6. 流行語(0)]『8. 芸人(+)]『11. 団体グ



- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろ () 内の符号は単独でのイメージ

図1 被調査者 A のデンドログラム

ループ(+)]『7.漫画(+)]の6項目でクラスター名は「若者の流行」とした。クラスター2は「クラスター2は今やっているものっていうか、主に若者が主流となっていて、それを知らない自分も若者だしっていうこともあって、若者が使っている言葉とか、ものとか文化っていうものがこれからは日本を知る上では最も必要だしっていうことはあるし。あとは周りの友達をつくる時にも同じ話題としてはこういうことを知るべきではないかというふうに考えてます。」と解釈した。

クラスター3は『9.電車(+)]『10.自転車(+)]の2項目でクラスター名は「交通手段」とした。クラスター3は「クラスター3は単に日本に来る前っていう感じは、一番ドラマとかアニメの中では電車とか自転車のイメージが強かったので。自転車は自分の故郷ではあんまり乗っていなかったし、電車ってそもそも何なのかなっていうふうに感じて。単に見ただけでは全然そういうイメージも付かないし、感じはしないから、来てすごく便利だっていう感じですね。」と解釈した。

クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「クラスター1は単に私が考えると、クラスター2よりもっと古いっていう、もっと伝統に向けたもので、クラスター2のほうは今若者が使っているもので、両方知らないと駄目だしっていう感じはしますね。」と解釈した。なお、クラスター1と3、2と3の比較においては、関連がないと回答した。

全体のイメージについては、「全体のイメージとしては、日本を知るためにもこれらが必要だし、昔のことはクラスター1の昔的なもので、クラスター2のほうは今使っているとかやっていることで、クラスター3は日本にいる時にはこういう交通手段とかを使うのが普通っていうか、そういう感じはします。(サブカルチャーと日本留学との関係は?)日本に留学するときは、ほとんど若者が一番主流となってるし、その人たちはまず日本語の教育を受けて、また自分でそういう日本について興味があったときにマスメディアやマンガとかいろいろ日本のことを知りたいと思ってこういうものを調べたりするし、例えば、この中の団体グループの音楽を聴くし、結構、関係してくると思います。アニメとかマンガとかあります。最初は日本語や日本に興味を持ったのも、多分、マンガですね。」と解釈した。

表1 被調査者Aのイメージを持つようになった切っ掛け

| | |
|-------------------|---------|
| クラスター1 | |
| 1. 日本のサブカルチャー (0) | × |
| 4. まつり (+) | 体験した |
| 3. 多文化社会 (+) | 自分で感じた |
| 12. インスタ映え (0) | テレビを観て |
| クラスター2 | |
| 2. 若者文化 (0) | × |
| 5. ツイッター (0) | 友達から聞いて |
| 6. 流行語 (0) | メディアで |
| 8. 芸人 (+) | テレビを観て |
| 11. 団体グループ (+) | ネットで |
| 7. 漫画 (+) | 本で |
| クラスター3 | |
| 9. 電車 (+) | ネットで |
| 10. 自転車 (+) | ネットで |

3.2. 被調査者 B の場合

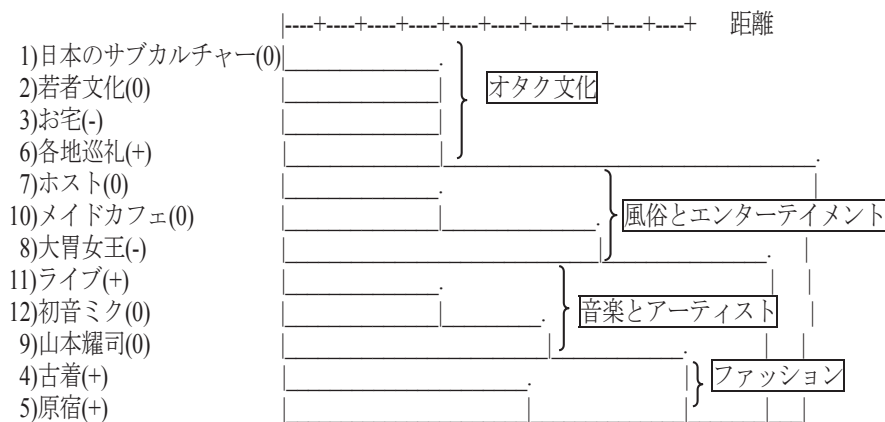
図2は、被調査者Bのデンドログラムである。

クラスター1は『1.日本のサブカルチャー(0)』『2.若者文化(0)』『3.お宅(-)』『6.各地巡礼(+)²⁾』の4項目でクラスター名は「オタク文化」とした。クラスター1は「まずは先生が提示した1番と2番、あとこういう部分の対象者はオタクが多いと思います。各地巡礼とはアニメとか現実に体験したいオタクとして重要な一部だと思います。こういう活動で若者は自分の文化を楽しめると思います。多分、各地巡礼とはアニメ限定ではない。映画とかドラマとか、こういう撮影したのを見てみると、こういう場所に憧れる、こういう普通の一般のイメージがあると思います。多分、中国で6番があると思います。オタクも中国で若者の中にいっぱいある。ただ、オタク、今は悪いイメージでニートと関連するかもしれないから、悪いイメージではないんですけど、こういう部分の中で一部の人を指摘するかもしれない。以上です。」と解釈した。

クラスター2は『7.ホスト(0)』『10.メイドカフェ(0)』『8.大胃女王(-)』の3項目でクラスター名は「風俗とエンターテイメント」とした。クラスター2は「クラスター2は実際、友達が9月来るって聞いて、日本のレジャーに関して考えているときに、ホストとかこういうメイドカフェとか考えていて、この質問紙をもらいました。だから、書きました。あと、大胃女王(大食い女王)、こういう人たちのYouTubeの動画はよく見ますから印象に残りました。まずはこういう人は芸能人の感じがあるんですけど、でも、実際は彼らの仕事です。」と解釈した。

クラスター3は『11.ライブ(+)'』『12.初音ミク(0)』『9.山本耀司(0)』の3項目でクラスター名は「音楽とアーティスト」とした。クラスター3は「クラスター3はライブ、あとは未来。こういう人、実際の。芸能人ではないんですけど、パソコンで作られたアイドルのイメージがある。あと、9番はアーティスト、服をデザインする人、なんかすごく有名で分かります。あと、11番と12番は音楽に関して自分が好きだからこういうものは気になります。」と解釈した。

クラスター4は『4.古着(+)'』『5.原宿(+)'』の4項目でクラスター名は「ファッション」とした。クラスター4は「クラスター4は、9番を書いた後でこういうファッションに関すること、日本人は中古屋さんが好き。中古の服装はすごくセンスがいいというイメージを持ってますよね。あと、原宿は他のファッション、あるいは新しい普段着れないものでも、こういう場所でいっぱい集まっ



- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろ () 内の符号は単独でのイメージ

図2 被調査者Bのデンドログラム

ているイメージがあります。」と解釈した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「クラスター1とクラスター2はクラスター1のほうがもっと範囲が大きいと思います。クラスター2はこういうサブカルチャー、文化の中で従事者の感じがあります。」、クラスター1と3について「クラスター1とクラスター3は代表者かな。こういう人たちは別に人ではない。キャラクターでもこういう文化を代表する人たち」、クラスター1と4について「クラスター1とクラスター4は多分、クラスター4はクラスター1の中の一部で、こういう若者たちはこういう服装とか好きだという感じです。」、クラスター2と3について「クラスター2とクラスター3は、一つはレジャーで、もう一つはもっと実際の音楽とか服装。クラスター2のほうはサービス業界で、クラスター3のほうはもっと自分の日常で楽しめるものだと思います。」、クラスター2と4について「クラスター2とクラスター4は多分、クラスター4の範囲はもっと大きいと思います。クラスター2のホストは女性向けの感じが強い、メイドカフェは男性向け、大胃女王（大食い女王）は多分グルメ向けの感じで、でも、クラスター4のほうに服装だからもっと一般の人向けだと思います。」、クラスター3と4について「クラスター4は服装だから実際毎日着ているから実感があるんですけど、クラスター3は個人が好きなの事なので、把握できない感じが強いですね。」と解釈した。

全体のイメージについては、「日本人は日本文化の範囲が大きいし、でも、中には矛盾の部分がいっぱいがあると思います。（矛盾？）矛盾ではない。対抗する部分があると思います。例えば、一部の人は古着が好き、一部の人はこういう新しい風潮が好き人が多いとか。あと、伝統的な文化、華道とか武道とかが好きなの人もいるし、新しいライブとかあるいはミクさんのような偽物、偽のアイドルが好きなの人もいるから。（サブカルチャーと日本留学との関係は？）あんまり関係ないです。」と解釈した。

3.3. 被調査者 C の場合

図3は、被調査者Cのデンドログラムである。

表2 被調査者Bのイメージを持つようになった切っ掛け

| | |
|-------------------|------------------|
| クラスター1 | |
| 1. 日本のサブカルチャー (0) | × |
| 2. 若者文化 (0) | × |
| 3. お宅 (-) | ニートのイメージを持っている |
| 6. 各地巡礼 (+) | 実際に文化を楽しむ |
| クラスター2 | |
| 7. ホスト (0) | 一応仕事だ |
| 10. メイドカフェ (0) | 一応仕事だ |
| 8. 大胃女王 (-) | 無理やり食べ物を浪費するイメージ |
| クラスター3 | |
| 11. ライブ (+) | 音楽が好きだから |
| 12. 初音ミラ (0) | 仮装の人物で実感が足りない |
| 9. 山本耀司 (0) | ファッションがよく分からない |
| クラスター4 | |
| 4. 古着 (+) | 服を再利用してセンスがいい |
| 5. 原宿 (+) | 多様なスタイルが共存している |

クラスター1は『1. 日本のサブカルチャー(0)』『2. 若者文化(0)』『3. 武士道(+)'』『6. 文化祭(+)'』の4項目でクラスター名は「日本文化のジャンル」とした。クラスター1は「クラスター1は日本文化の中のいくつかのジャンルを考えたもので、3は武士道精神ですけど、6は日本の高校文化の中の一環として扱っているものと考えています。武士道精神はかなり日本特有のようなイメージを持っていて、文化祭のような日本の高校文化も中国のような結構堅苦しい勉強環境の中には全然ないといっても過言ではない一つの文化。高校も大学も大体同じように考えています。かなり独特だと思います。」と解釈した。

クラスター2は『7. セーラー服(0)』『10. キャバ嬢(-)』『8. 喫茶店(+)'』の3項目でクラスター名は「学校文化と風俗」とした。クラスター2は「クラスター2は、7は学校文化の一つだけれども、10と8はサービス業の中で日本のアニメやテレビ番組が示した割合としては結構多いと考えます。例えば、7については日本の学生を考えると、制服、セーラー服を思い浮かべます。キャバ嬢は日本の夜の生活を考えると、最初に思い出すものはキャバ嬢で、喫茶店は日本の生徒のアルバイトや他の日常生活の中でよく出てくる店舗やサービスの一つと考えています。」と解釈した。クラスター3は『11. スカイツリー(+)'』『12. ロリコン(-)』『9. メイド(0)』『4. 侍(+)'』『5. 部活が自由(+)'』の4項目でクラスター名は「日本特有の文化」とした。クラスター3は「クラスター3の中で『9. メイド(0)』と『4. 侍(+)'』は日本特有のようなイメージを持っている文化、11は日本特有の建物です。『5. 部活が自由(+)'』は高校文化、つまり学習文化です。『12. ロリコン(-)』は日本でよく出てくる一つの単語というか、オタク文化の一つの側面、悪影響の側面を扱っています。結構、日本特有のものがあって、日本の文化を表すいくつかの側面と考えています。一番違うと実感できるのは5ですね。一番部活について。中国はほぼないといっても過言ではない国なので。とても堅苦しい勉強生活を実感したので。」と解釈した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「クラスター1は、いくつかの日本特有の文化、クラスター2はその文化からの具体的なイメージのようなもので。例えば、文化祭というと必ず喫茶店が出てくる、勉強というと制服、セーラー服が出てくる、というような。武士道は日本伝統文化なので、キャバ嬢はほぼ関係ないか。大体こういう文化を表すいくつかの具体的なイメージですね。クラスター2がクラスター1から生まれたような感じですかね。」、クラスター1と3について「クラスター1とクラスター3は、侍は武士の中でとても重要なものの一つ、



図3 被調査者Cのデンドログラム

表3 被調査者Cのイメージを持つようになった切っ掛け

| クラスター1 | |
|-------------------|---------------|
| 1. 日本のサブカルチャー (0) | × |
| 2. 若者文化 (0) | × |
| 3. 武士道 (+) | アニメ |
| 6. 文化祭 (+) | アニメ、番組、日本人の友達 |
| クラスター2 | |
| 7. セーラー服 (0) | アニメ |
| 10. キャバ嬢 (-) | 番組、アニメ |
| 8. 喫茶店 (+) | アニメ、実際に行ってみて |
| クラスター3 | |
| 11. スカイツリー (+) | アニメ、実際に行ってみて |
| 12. ロリコン (-) | アニメ |
| 9. メイド (0) | アニメ |
| 4. 侍 (+) | アニメ |
| 5. 部活が自由 (+) | アニメ、番組、日本人の友達 |

文化祭と部活が自由はほぼ一致していて、メイドも結構日本の伝統文化の中の一環として考えているので。クラスター3もクラスター1から生まれるというような感じですよ。クラスター2と3について「クラスター2とクラスター3、どちらも文化から生まれる側面だけれども、クラスター2はより現代社会に近いもの、クラスター3の中のメイドや侍など、ほぼ今は見られないものだと考えています。」と解釈した。

全体のイメージについては、「近代、日本のサブカルチャーは世界中によく知られる一つの分野であり、それが日本を知る一つのいい機会というか、日本とは具体的にどのような国なのかを知る一つ結構いい部分だと考えています。(サブカルチャーと日本留学との関係は?) それは私の場合は結構大きな関係があると思っています。私は日本語の勉強の前、まずは日本語学習の面からいうと、私は日本語を勉強する前に日本のサブカルチャーや日本のアニメや番組を結構見て、大体5年間、趣味の一つとしてよく見て、それが日本語の勉強の中で結構助けになるというか、この経験によって日本語の勉強がより易くなったというのは私の実感なんです。具体的にいうと、私は片仮名を勉強する前に日本語を聞いてるだけで何を言ってるかがほぼ分かるようになったのは私の実感なので。そして、日本留学との関係という、それは留学を決める際にどの国に行くかにおいては、一つはかなり重要なインセンティブになりました。」と解釈した。

3.4. 被調査者Dの場合

図4は、被調査者Dのデンドログラムである。

クラスター1は『1. 日本のサブカルチャー(0)』『2. 若者文化(0)』『9. SNSを使っている人が多い(0)』の3項目でクラスター名は「若者文化＝SNS」とした。クラスター1は「クラスター1は私の個人的に日本の若い人のイメージとして、若者文化とか、日本のサブカルチャーといったらまず頭から浮かんだことです。SNSは使ってる人が多いですが、これが代表的なイメージです。多分、日本の若い人は普段どんな生活をしているのか、あとは、テレビに出ている若者たちは何を考えているのか、生活や具体的にどんなエンターテインメントを楽しんでいるのか、どのような人間関係

か、いろんな私的なことを含めて、若者文化というイメージがあります。」と解釈した。

クラスター2は『3.漫画とアニメ(0)』『8.秋葉原(0)』『4.J-POP(-)』『5.アイドル文化(+)]』『6.ドラマ(0)』の4項目でクラスター名は「エンターテインメント」とした。クラスター2は「J-POP。クラスター2は若者文化の中でエンターテインメントとして外国人から見ると、日本の若い人の代表的な一番盛んな文化、私のイメージはマンガやJ-POPやドラマやアイドル文化等、そういうのは中国でも人気のある日本の文化です。」と解釈した。

クラスター3は『7.お笑い(+)]』『10.関西人が面白い(+)]』の2項目でクラスター名は「関西＝お笑い」とした。クラスター3は「クラスター3は若い人に限らず、この地域に関してのイメージはお笑い番組や芸人など、あとは関西人が面白いというイメージは私的にはあります。」と解釈した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2について「クラスター2は若者文化の一番代表的なグループとして、多分、この若者文化から出たものです。クラスター1からクラスター2が生まれた。」、クラスター1と3について「クラスター1とクラスター3は、お笑いはサブカルチャーとして私のイメージがある。でも、若者文化に限らずだと思います。」と解釈した。

全体のイメージについては、「全体的には若者文化が一番代表的だと思います。あとは、クラス

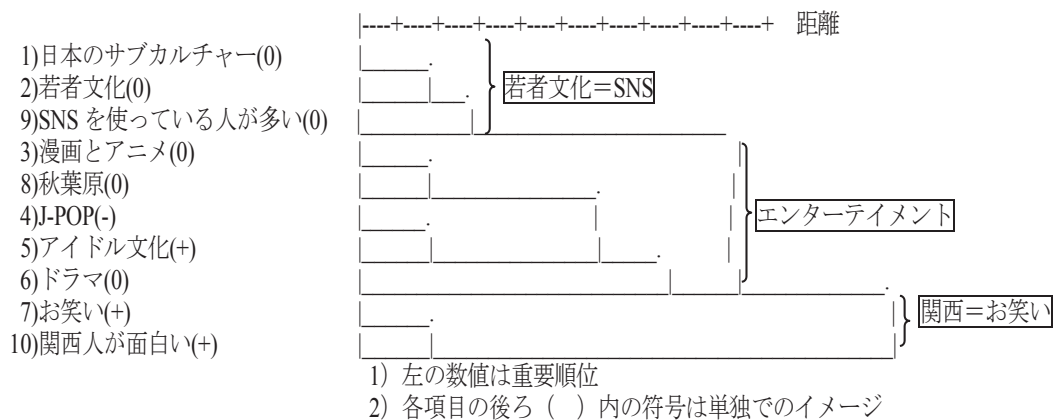


図4 被調査者Dのデンドログラム

表4 被調査者Dのイメージを持つようになった切っ掛け

| クラスター1 | |
|-----------------------|----------------|
| 1. 日本のサブカルチャー (0) | × |
| 2. 若者文化 (0) | × |
| 9. SNS を使っている人が多い (0) | インターネットで |
| クラスター2 | |
| 3. 漫画とアニメ (0) | テレビで |
| 8. 秋葉原 (0) | 実際に行った |
| 4. J-POP (-) | テレビで |
| 5. アイドル文化 (+) | 実際に日本人と付き合ってみて |
| 6. ドラマ (0) | テレビで |
| クラスター3 | |
| 7. お笑い (+) | テレビで |
| 10. 関西人が面白い (+) | 実際に日本人と付き合ってみて |

ター2は外国人から見た日本のサブカルチャーの中で一番盛んなことだと思います。多分、今、若い中国、アジアに限らず、全世界の中で日本のサブカルチャーは外国人にとって、とても魅力的だと思います。(サブカルチャーと日本留学との関係は?) 関係あります。サブカルチャーの中でマンガやアニメやアイドルなどが好きな人は、まず日本語の勉強をしたいという気持ちが絶対に生まれると思います。日本へ留学した理由の一つです。」と解釈した。

4. 考察と今後の課題

4.1. クラスターの比較

ここでは、被調査者4名のデンドログラムの解釈をもとにしたクラスターについて考察を行う。表は、被調査者4名のクラスターの一覧である。

表5 クラスター一覧

| クラスター | 被調査者A | 被調査者B | 被調査者C | 被調査者D |
|-------|---------|-----------|-----------|----------|
| 1 | 伝統と現代文化 | オタク文化 | 日本文化のジャンル | 若者文化＝SNS |
| 2 | 若者の流行 | 風俗とエンタメ | 学校文化と風俗 | エンタメ |
| 3 | 交通手段 | 音楽とアーティスト | 日本特有の文化 | 関西＝お笑い |
| 4 | — | ファッション | — | — |

第3章の被調査者のデンドログラムの解釈をもとに考察すると、被調査者B、C、Dにおいては、クラスター1がクラスター2、3、4の上位項目になっていることが分かる。また、被調査者B、C、Dにおいては、刺激語①日本のサブカルチャー、②若者文化が同じクラスター1とされている。ここから、被調査者B、C、Dは、日本のサブカルチャーと若者文化を同類のもの(クラスター1)と捉え、そこから下位項目(クラスター2、3、4)が派生したと考えていると、推察できる。個々に観察すると、被調査者Bは「サブカルチャーと若者文化」＝「オタク文化」として捉え、その下位項目として「風俗とエンタメ」、「音楽とアーティスト」、「ファッション」があると考えていると思われる。被調査者Cは、「サブカルチャーと若者文化」は「武士道」等の日本文化のジャンルの一つとして捉え、そこから「学校文化と風俗」、「日本特有の文化」が生まれたと考えていると推察できる。被調査者Dは、「サブカルチャーと若者文化」＝「SNS」として捉え、そこから「エンタメ」、「関西＝お笑い」が派生したと考えていると察せられる。一方、被調査者Aは、「サブカルチャー」と「若者文化」を同類のものとは捉えていない。「サブカルチャー」は「祭り」や「多文化社会」等、どちらかと言うと伝統的な文化のイメージとして捉え、「若者文化」は「ツイッター」や「流行語」等の「若者の流行」として考えていると推察できる。以上のことから、サブカルチャーと若者文化は同類のものとして捉えられることがあり、また流行や風俗等を産み出す母体としても考えられていると言えよう。

4.2. 被験者4名のイメージの共通点と特徴

ここでは、被調査者4名の中で複数名に見られるイメージの共通点について考察を行う。

「ソーシャル・ネットワークキング・サービス」(SNS)は被調査者A「インスタ映え」「ツイッター」、被調査者D「SNSを使っている人が多い」に、「お笑い」は被調査者A「芸人」、被調査者D「お笑い」「関西人が面白い」に、「風俗」は被調査者B「ホスト」「メイド」、被調査者C「キャ

バ嬢」「メイド」に、「漫画」は被調査者 A「漫画」、被調査者 D「漫画とアニメ」に、「音楽」は被調査者 B「ライブ」「初音ミク」、被調査者 D「J-POP」に、「東京」は被調査者 B「原宿」、被調査者 C「スカイツリー」、被調査者 D「秋葉原」にそれぞれ見られた。

中国人を対象とした対日観に関する先行研究では、表 6 に見られるようなイメージが観察されており、本研究での「サブカルチャー・若者文化」のイメージとは、全く異なると言えよう。

表 6 対日観とサブカルチャー・若者文化

| | |
|--------------|--------------------------------|
| 先行研究での共通イメージ | 規則遵守／礼儀正しい／親切／生活水準が高い／外国人差別／曖昧 |
| 本研究での共通イメージ | SNS／お笑い／風俗／漫画／音楽／東京 |

また、被調査者 4 名の共通点としては現れなかったが、各被調査に単独で見られた特徴的なイメージを取り上げる。まず、被調査者 A に見られた特徴としては、「交通手段」が挙げられる。このイメージはインターネットでのドラマやアニメから得られたものであり、来日後、実体験として強化されたものと考えられる。被調査者 B の特徴としては、「ファッション」が挙げられる。「古着」と「原宿」というイメージでクラスターが形成されており、また「山本耀司」というファッションデザイナーの名前も挙げられている。被調査者 C の特徴としては、「学校文化」が挙げられる。「文化祭」、「セーラー服」、「喫茶店」、「部活が自由」というイメージが挙げられている。被調査者 D においては、「アイドル文化」というイメージが見られる。「アイドル文化」を「漫画」、「J-POP」、「ドラマ」等と同類として捉え、中国でも人気のある日本文化としている。

4.3. 日本留学とイメージの切っ掛け

ここでは、サブカルチャーと日本留学の関係とイメージを持った切っ掛けについて考察を行う。

まず、サブカルチャーと日本留学の関係については、被調査者 B 以外は関係があったとした。被調査者 A は、最初に日本語や日本に興味を持った切っ掛けは漫画と述べた。被調査者 C は、日本語を勉強する以前に日本のサブカルチャーやアニメを見ていたと述べた。被調査者 D は、漫画やアニメ、アイドルが好きな人は、日本語の勉強をしたいという気持ちが生まれると述べた。以上、被調査者 A、C、D に共通するものは、漫画、アニメである。日本の漫画、アニメは、クールジャパンの代表として取り上げられるものであるが、大塚 (2018) が述べている通り、中国の大学院生等においてもその影響力は大きいと言える。また、漫画、アニメの影響力は、交換留学生や大学院生だけではなく、中国人訪日旅行客の魅力的な旅行動機にもなっている (付・方 2017)。

次に、イメージを持った切っ掛けについては、インターネットやテレビ等のメディアと、実際の経験 (日本での体験や日本人の友人) に大別できよう。日本に留学する前はメディアを通じてイメージを抱き、日本に留学した後は実際に経験してイメージを強化、あるいは新たに抱くようになるものと考えられる。

4.4. マイナスイメージ

被調査者 4 名がマイナスのイメージを持っているものについて考察を行う。

被調査者 A は、マイナスのイメージを持ったものは無かった。被調査者 B は、「お宅 (オタク)」と「大胃女王 (大食い女王)」にマイナスのイメージを持っている。これについて被調査者 B は「オタク」は「ニートのイメージ」、「大食い女王」は「無理やり食べ物を浪費するイメージ」と述べて

いる。「オタク」については、日本においても以前は家に引きこもって人と交流をせずにマニアックな趣味に走る人というイメージがあったが、昨今は自分の趣味を極めた専門家というイメージも浸透しつつある。この辺りは、日本人の認識と中国人の認識が異なる点かもしれない。「大食い女王」は「フードファイター」と呼ばれることもあるが、日本ではテレビ番組の名物企画として確立しているが、この中国人留学生はエンターテインメントとして楽しむことができないと考えられる。被調査者Cは、「キャバ嬢」と「ロリコン」にマイナスイメージを持っている。これについて被調査者Cは「キャバ嬢」は「日本の夜の生活を考えるとき、最初に思い出すもの」、「ロリコン」は「オタク文化の一つの側面、悪影響の側面」と述べている。「キャバ嬢」については、「日本のアニメやテレビ番組が示した割合としては結構多い」と述べている通り、ドラマ等でマイナスイメージを与えられ取り上げられることが多いからと考えられる。「ロリコン」については、被調査者Bと同じように昔の「オタク」が持つマイナスイメージとして捉えていることが分かる。被調査者Dは、「J-POP」にマイナスのイメージを持っている。被調査者Dは、「J-POP」を漫画、ドラマ、アイドルと並列に扱い、「若い人の代表的な一番盛んな文化」、「中国でも人気のある日本の文化」と述べており、何故マイナスのイメージを持っているのかは不明であるが、個人的な好悪によるものかもしれない。

4.5. まとめと今後の課題

本稿では、中国人交換留学生がサブカルチャーを通じて日本文化をどのようにとらえているのかを考察した。その結果、以下の点が推察された。(1) 中国人交換留学生は日本のサブカルチャーと若者文化を同類のものとして捉えることがある。(2) サブカルチャー・若者文化から流行が産み出されると考えている。(3) サブカルチャー・若者文化として「SNS」、「お笑い」、「風俗」、「漫画」、「音楽」、「東京」というイメージを抱いている。(4) サブカルチャー・若者文化は、伝統的な日本の文化や特徴とは異なると考えている。(5) サブカルチャーの中でも、特に漫画やアニメが日本語学習や日本留学の動機になっている。(6) オタクについてはマイナスイメージを持っている。

以上の点が考察できたが、「サブカルチャー」と一口に言ってもその領域は多岐に渡っており、宮沢他(2017)ではその相関図が示されている。実際、本校でも中国人留学生が抱いたサブカルチャーについてのイメージは多様であった。今後はサブカルチャーの中でも漫画、アニメ等、特定のものに絞り、調査を行いたい。また、サブカルチャーだけではなく、留学生の日本での生活に直接関連するアルバイトを通じた対日観についても取り上げてみたいと考えている。

付記

本論文は、日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究C(課題番号:17K02838, 研究代表者:安龍洙)の助成によるものである。

注

- 1) 「①日本のサブカルチャー、②若者文化」は研究者が予め設けた項目でプラス・マイナスのイメージ評価はさせなかったため、本稿では(0)と記す。
- 2) 被調査者Bは「各地巡礼」と述べたが、これは漫画やアニメの舞台となった土地を訪れる「聖地巡礼」のことと思われる。

引用文献

- 安龍洙 (2010) 「外国人の対日観に関する研究－中国人非正規留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 8, 1-17.
- 安龍洙 (2012) 「外国人の対日観に関する研究－中国の少数民族出身者の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 10, 1-14.
- 安龍洙 (2013) 「外国人の対日観に関する研究－中国人留学生の来日前後の対日観を比較して」『茨城大学留学生センター紀要』 11, 1-15.
- 大塚英志 (2018) 「特集 日本研究の道しるべ：必読の 100 冊 ポピュラーカルチャー」『日本研究』 57, 129-142.
- 付靖秋・方蘇春 (2017) 「インバウンド観光におけるコンテンツツーリズム～訪日中国人と知覚リスクを中心に」『聖泉論叢』 25, 57-70.
- 松田勇一・安龍洙 (2018) 「日本社会における中国人交換留学生の異文化理解に関する一考察」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』 1, 69-83.
- 宮沢章夫・大森望・泉麻人・輪島裕介・都築響一・さやわか (2017) 『NHK ニッポン戦後サブカルチャー史 深掘り進化論』NHK 出版
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2018) 『JASSO 概要 2018』 https://www.jasso.go.jp/about/organization/_icsFiles/afieldfile/2018/08/03/jasso_gaiyou2018.pdf (2018 年 9 月 26 日閲覧)

参考文献

- 安龍洙 (2008a) 「韓国人留学生の対日観の変容に関する一考察－個人別態度構造分析法 (PAC 分析法) を用いて」『留学生交流・指導研究』 10, 31-48.
- 安龍洙 (2008b) 「韓国人の対日観に関する一考察－個人別態度構造分析法 (PAC) を用いて」『ユーラシア研究』 5(3), 107-125.
- 安龍洙 (2009) 「外国人の対日観に関する事例研究－韓国人短期留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 7, 1-13.
- 安龍洙 (2010) 「外国人の対日観に関する研究－日本滞在歴の長い韓国人の場合」『ユーラシア研究』 7(4), 373-392.
- 安龍洙 (2011) 「外国人の対日観に関する研究－ベトナム人留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 9, 1-18.
- 安龍洙 (2016) 「日本で就職した元韓国人留学生の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』 14, 93-105.
- 安龍洙・宋有宰 (2013) 「外国人の対日観に関する研究－日本滞在歴の長い韓国人留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 11, 81-96.
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施入門：「個」を科学する新技法への招待 (改訂版)』ナカニシヤ出版
- 原沢伊都夫 (2013) 『異文化理解入門』研究社, 58-59.
- 松田勇一 (2013) 「外国人の対日観に関する研究－ベトナム人留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 11, 97-111.
- 松田勇一 (2014) 「外国人の対日観の変化に関する研究－ウクライナ人留学経験者の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 12, 55-74.
- 松田勇一 (2017) 「外国人の対日観の変化に関する研究－台湾人日本永住者の場合」『茨城大学留学生センター紀要』 15, 41-59.